

『月光仮面』よりすごい勇者へ

清水久美子（ライター・青山キャンパス）

お話を聞いて痛切に思ったこと、それは「この話を書きたい！」であった。

学生運動とも組合活動とも無縁だった方が、「こんな薬は誰にも飲まされへん」という一念で、組合をつくって仲間と闘いを始められた。

会社の弾圧がいかに激しかったかは、80人が名を連ねた組合が、瞬く間に7人に減ったことが如実に物語っている。その後も続いた会社の執拗で過酷な組合つぶしの様子を、北野さんはユーモアを交えながら淡々と語っておられたが、「7人の侍（組合員）」たちの11年間の苦闘は、筆舌に尽くしがたいものがあったはずである。

いつまで耐えればいいと、先が見えるのなら人はまだ我慢ができる。そうではなかったのだから、いったいどれほどの忍耐と勇気が必要だったのだろうと思う、北野さんを含めた7人の方が、11年もの長きに亘って、不屈の精神を持ち続けたことに、ただただ頭が下がる。

到底くらべものにはならないが、私もささやかに闘った経験はある。

拙著『君のためならがんばれる』（現在『サッカーボーイズ明日への絆』として復刊）をもとにして、10年ほど前に、あるテレビ局の下請け会社が15分ほどのドキュメンタリー番組をつくった。にもかかわらず、「独自に取材した」と主張して、拙著のクレジットを入れずに放送した。

足で歩き、多くの人に取材し、事実を探って綴ったノンフィクション作品が、こんな扱いをされたのでは、私だけでなく、ノンフィクションを生業にする人間は救われない。

「闘うとブラックリストに乗るよ」と忠告する方もいたが、証拠をかき集め、日本文藝家協会に頼んで、抗議した。あの手、この手で言い逃れようとする先方に、怒りとストレスが溜まり、夜眠れない日もあった。1年かけて、やっと、間の抜けた詫び状一枚を手にはすることはできた。

私のこの小さな体験でさえ、かくも苦しかったのだから、北野さんたちの苦労とストレスはどれほどのものだったのだろう。

想像を絶するものがあったと思う。

北野さんは、『月光仮面』に負けない、いや『月光仮面』よりすごい勇者である。

しかも、見事、ダニロン錠の販売断念を勝ち取っただけでなく、発がん性試験の義務化等々の、さまざまな成果もあげられた。

快挙である。

「素晴らしい」の一言に尽きる。

胸のすく話である。

気負いもなく自然体で始められた活動。会社のすさまじい弾圧に耐え、仲間の絆と家族の理解に支えられ、周りからのさまざまな支援を得て 11 年間で闘い抜かれた——苦闘と、連帯と、絆のすばらしさ。

1 時間余では話しきれない、数々の胸を打つドラマがたくさんあるに違いない。それを、ぜひ聞きたいと思った。

また、言うに言われぬ辛酸をなめさせられた会社なのに、北野さんは学生たちに就職を勧めると言われる。なぜなのか、何がそうさせるのか。短い時間ではとても語りつくせないものがあると思って、質問はしなかったが、私の中で大きな不思議として残っている。

ともかく、今回の授業がそうであったように、北野さんの物語は、多くの人の胸を、熱くさせるのではないだろうか。

資産格差、所得格差が広がり、「なにをやっても無駄」と閉塞感が押し寄せる、いまの世の中。北野さんの素晴らしい話は、もっと多くの人に知ってほしいと思った。「やればできるかもしれない」と、大勢の人に勇気を与えることができると思う。

国の薬事行政の改革を大きく促したことを考えても、埋もれさせてはいけない。なんらかの形で後世に残してほしい話だと思った。

素晴らしい話をありがとうございました。

北野さんが名刺切れで、お名刺をいただけなかったのが残念です。

もし差し支えなかったら、ご住所を教えていただければ、まことに幸いです。